

活気と潤いがあり、みんなが「育つ」学校を目指して

## 自分の一歩 みんなの一歩

### 校長室だより II

朝霞市立朝霞第一小学校

令和3年5月21日

No. 15 (合同No.4)

校長 野口 邦彦

## 「インクルーシブ教育」理想と現実の狭間で

前回（No.13）の続きです。前回は「困った子」ではなく「困っている子」を中心に書かせてもらいましたが、今回は共に過ごす集団という視点で書かせてもらいます。

今、教育界で重要とされているものに「インクルーシブ教育」があります。「障害があるなしに関わらず、みんなが同じ環境の中で共に学んでいく」ということです。私も担任時代、発達や外国籍、生徒指導面等、いわゆる配慮を要する生徒を担当することもたくさんありました。そんな時に苦勞したのが、配慮を要する児童への対応というよりも、それを受け入れるクラスの理解や指導です。学級経営において「平等」ということは大切な要件です。でも、配慮を要する子に対しては、どうしても「特別な対応」をせざる負えない時があります。それに対して、周りの子（保護者）にどう理解してもらうか、一番悩むところです。「インクルーシブ教育」の大切さは十分に理解しています。しかしながら、これを実現させるためには、子ども達の精神的な成長、保護者の理解・寛容さ、安心安全な環境の確保、「みんなで育ってく」という意識の醸成等、様々なハードルがあります。私達は学者や評論家ではありません。常に理想と現実の狭間の中で、様々な工夫をしながら対応していくしかありません。「こうすればうまくいく」といった、絶対的な答えがあるわけでもありません。確かなことがあるとしたら、こういった事は、決して一人で悩むことなく、管理職を含めてみんなで相談しながら、チームとして対応していくしかないということです。そして、すぐの解決（工夫の中で回避はできますが）は難しく、本当の意味での解決には長い年月がかかります。

「インクルーシブ教育」これに反対する人は誰もいないでしょう。でも、現実として、いざ自分に影響を及ぼしてくると、防衛的なものが顔を出すのが人間です。だからこそ、様々な対応や取組を通して、児童、保護者、教師等、みんなで考え、育っていかなければいけないのだと思います。「インクルーシブ教育」に限らず、学校には、理想とそれを実現する難しさがたくさん存在します。でも、難しいからと言って、避けるわけにはいきません。常に「子ども達の為に」そして「子ども達の未来の為に」現実と向き合いながら、みんなで頑張っていきたいと思います。

自分の行動に  
落とし込まないと  
知識は役に立たない。